西東京稲門会・散策の会 例会報告

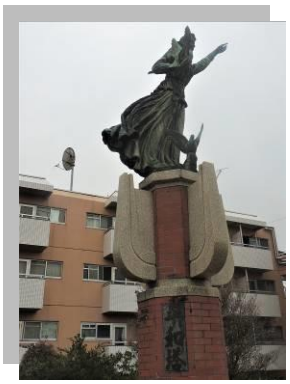
2020年2月

東村山から西国分寺

２月２５日　（火）　くもり

★ １月例会は雪のため中止となり、一月遅れで鎌倉街道を東村山から西国分寺まで歩いた。新型コロナウイルスの感染拡大や杉花粉の飛散などの影響で参加者が少なくなるかと思ったが、９名が参加していつもの通りの散策の会となった。夜になって雨が降るという予報が出ていたが、天気は薄曇りで風もなく寒くもないまずまずの散策日和であった。

★ 西武新宿線・東村山駅の改札前に午後１時半集合。東村山駅の改札は、以前は階段を登って２階にあったが、駅の改装工事中で改札は地下に変わっていた。東口に出るとすぐ大きな道があるが、これが府中街道であり、旧鎌倉街道である。この道を南に向かって 500mほど行くと西武新宿線の踏切を渡る。踏切のすぐ横に「平和塔公園」があるが、公園というよりは小さな空き地といった感じである。一画に高さ 3mほどの塚があって、塚の上には民衆を率いたジャンヌダルクのような形の平和の女神像が立っている。この周辺は近世初頭から中期にかけて広々とした秣場（まぐさば）であったが、入会地の秣場開墾をめぐって対立が生じたときに、村々の境界を示すために塚が作られたという。これを「境塚」と言い、そのひとつであるという。踏切から更に 500mほど行くと新青梅街道と交差し、空堀川に架かる野口橋となる。



平和の女神像

野口橋より空堀川をみる

★ 野口橋から 100mほど南に下ると右手に八坂神社がある。この神社の創建は弘安年間（1278～）とも応永年間（1394～）とも言われるが、明治８年に八坂神社と改め村社に列せられたとある。平成元年（1989）に現在の社殿が完成したという。広い境内と立派な社殿を持った由緒のある神社である。鳥居の前の河津桜が既に満開、境内にある山桜もほぼ満開となっているのには驚いた。

八坂神社の社殿

満開の河津桜

山桜に鳥が止まっている

★ 八坂神社から 700mほど歩き、西武多摩湖線のガードを過ぎると間もなく「九道の辻」である。ここは鎌倉からも前橋からも十八里（72ｋｍ）で鎌倉街道の中間点であり、江戸道、引股道、宮寺道、秩父道、御窪道、清戸道、奥州街道、大山街道、鎌倉街道の 9 本の道が交差していたので「九道の辻」という名前がついたという。交差点に立って数えてみると 7 本の道が確認できた。あとの 2 本はブリジストンの工場内を通っていたという。交差点の下を野火止用水が流れている。松平伊豆守信綱が玉川上水から分水して自分の領地へ引いたものである。
新田義貞が鎌倉攻めに向かう途中、この辻で鎌倉への道を見失い、ここに 1 本の桜を植えて街道の目印にしたという伝説がある。「迷いの桜」または「九道の桜」と呼ばれている。桜の木は何度か植え替えられてきたが、大正時代に枯れてからはしばらく桜の木がなかった。しかし昭和 55 年（1980）に現在の木が植えられた。交差点の角の交番の裏にある。

九道の辻

野火止用水

迷いの桜

★ 九道の辻から先、旧鎌倉街道はブリジストンの工場敷地内を通っていたので、我々は工場沿いに府中街道を南に進み、小川駅東口交差点を左折して工場の南を回って再び旧鎌倉街道に戻った。そこからは小綺麗な住宅が立ち並ぶ新興住宅地や梨・ブドウなどの果樹園の広がる長閑な田園都市である。やがて右手に津田塾大学の森も見えて玉川上水に着いた。鎌倉橋である。

★ 鎌倉橋から五日市街道までの 300mほどの道には「旭ヶ丘中通り」という名前が付いているが、商店街でもなくごく普通のありふれた住宅街である。「旧鎌倉街道」で良いものを何故「旭ヶ丘中通り」と付けたのか理由がよく分からない。
五日市街道を境に国分寺市に入るが、旧鎌倉街道は住宅街の中に紛れて分からなくなる。そこで五日市街道を上水本町の交差点まで行き、府中街道を南へ向かう。600mほど行くと複雑な形の五差路がある。府中街道と連雀通りが 30 度の角度で交差している所で、府中街道に直角に西武国分寺線の恋ヶ窪駅へ向かう道が分かれる「恋ヶ窪」の交差点である。「恋ヶ窪」というロマンチックな地名は坂東武者の畠山重忠と遊女・夙妻太夫（あさづまだゆう）の悲恋に由来するという説もあるが、武蔵国の国府の北にある窪地、すなわち「国府が窪」が地名の由来だというのが定説のようである。

★ 更に南下して、西武国分寺線の踏切を渡ったところで線路に沿って左折し、100mほど行くと旧鎌倉街道に出会うことができる。旧街道に沿って「恋ヶ窪用水路周辺緑地」となっている。ここには玉川上水が開通したあと、明暦 3 年（1657）に出来た国分寺分水のひとつ、恋ヶ窪村分水の遺構が残っている。城の空堀と似たような堀である。写真を撮ったが実物とは大分印象が違うので、説明板の写真を載せておく。

★ 恋ヶ窪村分水と道ひとつ挟んだ向かいにあるのが熊野神社である。和歌山県の熊野の大神を勧請鎮座したもので、創建時期ははっきりしないが、新田義貞と幕府軍に戦いのときに焼失したという。本殿に向かって左手前に歌碑がある。文明 18 年（1486）、聖護院門跡の道興准后が「廻国雑記」に詠んだもので、「朽ち果てぬ　名のみ残れる　恋ヶ窪　今はた訪ふも　知記（ちぎ）りならずや」とあり、書は有栖川宮熾仁親王によるものである。

熊野神社本殿

道興准后の歌碑

★ 熊野神社から 200～300mで東福寺である。石段の下に「傾城の墓」という石塔があり、傍らに傾城墓由来の碑が立っていて、畠山重忠と夙妻太夫のことが書いてある。
東福寺から旧道を離れて 250mほど行くと姿見の池がある。かつては付近の湧き水や恋ヶ窪村用水が流れ込み、清水をたたえていた。鎌倉街道の宿場であった恋ヶ窪には多くの遊女がいて、彼女たちは朝な夕なに自らの姿を水に映して化粧をしていたので「姿見の池」と言われるようになったという。

ここには「一葉松（ひとはまつ）」という伝説が伝えられている。畠山重忠と夙妻太夫とは恋仲であったが、太夫に熱を上げるもう一人の男がいて、その男は重忠が平家との合戦で討ち死にしたと嘘をつき、諦めさせようとしたが、太夫は重忠の死を悲しんで姿見の池に身を投げてしまったという。太夫の死を哀れんだ村人が松を植えたが、悲しみの為か松は一葉になってしまった。この松は枯れてしまったが、実生の松が東福寺の傾城の墓の横に植えられている。

傾城の墓

一葉松

姿見の池

東福寺にて　真ん中にあるのは「恋の鐘」

この鐘を鳴らすと恋が叶うとか　年甲斐もなく鳴らした人も

今回は４人の俳人の競作となりました。

春霞　鎌倉古道　見え隠れ
白梅や　はにかみ鳴らす　恋の鐘
姿見の　池に鯉鴨　むつまじく　　金子　正男

花曇り　武者も迷ひし　九道辻
庭隅の　板塀越しに　花馬酔木　　志賀　勉

轉り（さえずり）や　菓子頬張りて　休みをり
梅曇り　秘めた浪漫や　「恋ヶ窪」　　辻　直邦

沈丁の　香に振り返り　上水道
鎌倉へ　通じる道に　木瓜の紅　　水野　博司

参加者　奥野和雄、金子正男、小島恕雄夫妻、志賀　勉、辻　直邦、水野聰夫妻、水野博司

以上９名

写真と文　小島恕雄